

知るや知らずや母上は  
我が凱旋を待たるらん

四

ふりさけ見れば涙々と  
雲山千里でらせども  
ゆくへも知らぬわれ故に  
何を夢みんこの夕べ  
こよひ限りの見納めと  
つきも哀れと思ひけむ  
着空飛ぶ雁がね二三聲

五

折しも響く喇叭の音  
眠さまして呼びたてぬ  
故郷の空を伏し拜み  
われは死地へと赴かむ  
一日の如くはぐまれし  
先立つ罪は幾重にも  
剣とりなほし勇ましく

指折り數へ今日明日と  
されど母上ゆるされよ

月は東の中空に  
故國に残りし母上は  
いと暗路にふみ迷ひ  
明日に迫れる激戦に  
取出す寫眞みつむれば  
雲に隠れて朧なり  
夜既に更けて風寒し

暫しまどろむ兵士の  
若き士官はこれまでと  
『さらば母上いざさらば  
二十餘年の春秋を  
鴻恩報ゆる時もなく  
ゆるさせ給へさらばとて  
たち出でたるぞ健氣なる。』

老人物語

雨　峰　生　譯

これは原作韻文であつて『オーズオーズの泉』の歌なのを韻文でなく言文一致に意譯して見たのですけれど、どうも甘く出来ないので汗顔なのですが、いくらか、老人の言葉のうちの意味をくむが出来ますれば、嬉しいのであります、老人物語としたのは、對話中のマツシユー先生の方に重きを置いたのであります、其のつもりにて、讀んでください。

私たち兩人は、お互に懐しい、信の情を、うち明けまして、假令んは、マツシユーさんの方は、七十二にもならずと云ふ、お爺さんで、私の方はほんの子供とも孫とも云ふべき様な形では御座いますけれど、友達づれと云ふ鹽梅で、今そちこちと笑話なぞしつゝ、歩き廻つて居たので御座いました、聽て廣く廣く、枝や幹を擴げて被い蓋つて居る、大きな樫の樹の下の處の苔や芝で一面奇麗になつて居る、休憩するのに屈境と云ふ處に、兩人

は坐を占めまして、そこで休憩するとしました、げに其處の芝生の間には一條の清水が、ちよろ／＼、さらさらと、恰當白い小蛇かなんか、くねり／＼て行くやうに、私達の脚下を流れて居るので御座います、

私は「マッシュユー」さんと呼びかけ更に言葉を續けまして、

『アノコンナに此の泉は、愉快な調子で流れて居るのですから、何か流の調子に合ふやうな、鄙歌でも何でも謡つて聞かせてくれませんか、この暑い盛りの夏のに應はしいのを一曲謡つて呉れませんか、それでなくば會堂でお謡ひなされるの讚美歌かなんぞでもよう御座います、何なら、あの去年四月頃お作なされた俗曲でもいい、のですから、この涼しい樹の影の下で謡つて聞かせて下さ

いな』

と申しましたが、このお爺さんのマッシュユーさんは、何とも返事をしないで、只樹下蔭をさら／＼と流れゆく清水の方に斗り目を配つて、暫時黙つて何か考へて居つたものと見えました、が、この何となく愛らしいそして、銀のやうになつて終つた白髪を翳せるお爺さんは、言葉を切り出しました、

『嗚呼この泉の流の心地よく流れ去つて、末は何處の谷の底、果てしも知れぬ處々と流れ／＼てゆくものかと、熟／＼思へば、この流の現在も流るゝ如く、行末とても同じくて、さては、千年萬年も變るとなく流るゝならん、常の姿の羨ましきに、思へば吾身如何にぞや、齡も未だうらわかき、少年時代のその折には幾たびとなく、この川

邊、樂しき遊をつゞけつゝ、其の樂は朝暮に、斷  
 ゆる時となかるらむ、永くも健に續くらんと思  
 ひたりしも仇し夢、吾身も世々は古り果て、昔  
 しながらの水音を耳にするさえなかくに、眼も  
 涙はうるみながら、胸もふどくしてなりませぬ、  
 今の様にと老ひばれましては、何事も駄目で御  
 座んす、過ぎにし事は何事もかへす術なき事なれ  
 ば、そは兎も角もの事ながら、此くも吾身も年古  
 りし事と思ふと、何となう、心も痛き次第なので  
 御座りまする、それに引き換え羨ましいのは、夏  
 の梢に飛びかふ小鳥や、岡の邊にさすらふ雲雀、  
 どれ程楽しい事かと思はれます、おのがし、樂しと  
 思ふ其折は、花のやうなる冠をゆるめつ、伸しつ、  
 欲する儘に身をあつかふ、すがくしたる其の様  
 のいかに羨しいと思はれます、搗て、加へて

小鳥奴はさがなき人の様ではなく、かの造化婆の  
 爲すまゝに、身をは委ねて、彼此の善惡を争ひ、  
 憂き悩み、心纏はるとしてなく、若きがうちは、  
 若き時とて幸多く、老ゆれば老て氣も輕るやかに、  
 暮すは何たる果報な事ぞや、吾身をこれに較へ見  
 ば、憂愁浮沈世の柵に墮かれゆき、昔し歡樂の夢  
 の跡をば、只この胸の底にのみ、浮べて見るがせ  
 めての事、樂しと顔に現すなぞ、いと、稀なる事  
 とのみ、成り果てしかと思ふにつけ、墓なきもの  
 と思はるを考へ給へ見玉へかし、  
 世には遠きく黄泉の旅に逝りし、その思ひ子  
 の身の上を偲び廻らして、身にひき添へ考ひわづ  
 らふ人にとりては、格別の幸もまた其の中にはあ  
 るめれども、さてもくおのが身の今の今と云ふ  
 今こそ、友と云ふべき友さえなく、獨りぼつちに

生き残れるわが身の程は、何となう、心細くも思はれます、何やかやとて、わが身の上、心配りをなし呉る他人もなきにはあらねども、儘にわが身を委ぬべき知己、親戚もなき事かと思ひ出づれば出づる程、悲しい事の限りです、

と云ふて語りしこの述懐、憂愁の眉根もわはれなるに、おのれも堪えずなりましたから、私は、『お爺さん、そんなとはお止しなさいよ、お互に愚痴こぼすのはいけませんから止ませうよ、こんな廣びるとした野原にきたものを、拙きながらも、歌一曲なと呻吟もうでは御座いませんか、もしや貴下の御子息で再び此の世に歸らぬ人となりなると云ふ事なら、私や貴下の子息となりませぬ、』と云へば、お爺さんは、はつと私の手を握り、

オロ／＼聲にて、

『どうしてどうして、左様な事など、ありませうぞと云へど中には、何か悲哀の種もやわらんと思はれました、

かくて兩人は此の小流の傍を立ち、滑かなる坂途をば辿り／＼と下りゆき、森の緑葉、茂り合ひ、小羊なぞの行き通ふ逕に歩を進めてゆきました、とう／＼レオナルトの巖屋にまできました、

ろ、お爺さんは讚美歌やら、俗曲やら、物に狂へる調子の如、謠ひながらにゆきました。

憐れな花賣娘

村田 錦葉

「花え花え」と如何にも寒むさうに悲しむさうな聲を上げて花束を携へながら、京都三條通りを室町